

あを 10

2020



須賀忠男のBird Note



東川の側道を
歩いてみると
桜の花の中に
コサギが
美しいシンに
出会った

十月集

佐藤喜孝

北海道

雲海や窓のよごれを千歳まで

蝶捕の子供が入るほどの網

蝶捕の荷の嵩ばらず泉汲む

一本ポプラ星座表より星あまた

その中の一つの星が迂りだす

天球の星それぞれにうごめける

雪豹の肉球をみる夏の空

白熊に滝あり儘きぬ音のあり

海原に紙きれ夏の日を集め



夏終る

森 なほ子

在りし日の遠くなりゆく籐枕
明け易し古希遠く過ぎてなほ母の夢
子らの丈伸びてひまはり種となる
こまごまと構内放送秋暑し
終点まで一人も降りぬ暑さかな
空っぽの引出しに空蟬一つ
キリマンジャロコーヒー熱く今朝の秋
降り過ぎの後照りすぎて夏終る



八月

赤座 典子

秋立つ日三十五度の徒ならず
籠りある長崎の忌の深呼吸
敗戦日兵隊さんの父の文
災厄を数多乗り越え生身魂
会へぬ子よ送りし花火ためせしや



晩 夏

秋 川 泉

煌めくや雨の雫の蜘蛛の糸
コロナ禍や百貨店閉づ梅雨最中
のびてのびて空をつかむや胡瓜蔓
肌脱ぎのふはふはドレスハイヒール
月見草砂ざらざらと足のうら
夕景の川辺の熱や藪枯
くれなづみ紅濃くなりし酔芙蓉
建て売りの明かりがともる晩夏かな

朝 顔

大日向幸江

亡き友と話は尽きず送り盆
時々気分を変へて酔芙蓉
名月やパンダ顔せる雲の出て
河骨や川渡り来る秋田犬
介護館朝顔の花満開に
指を吸ふ癖ある猫に買ふアイス
籐寝椅子眠りの森に入りけり
突然に空砲ひびく豊の秋



バトン

七郎衛門吉保

渡されるバトンの重し長崎忌

八月六日ミーンミンミンミーンミ

雲の峰反核願ふ手の鎖

「八月の狂詩曲」は反戦映画

炎天や逃水の玻璃もくもくと

声の無く草伸び放題のプール

色なき風願へど頬に火熨斗かな

夏果つや訳分らずのカタカナ語

花式部

篠田 純子

るり揚羽出生銀座一丁目

くま蟬シャシャシャ病棟のあの一樹

夏早暁梅干ひとつ粥半膳

網戸越し夫とすずめの会話密

尊厳死選びし友や花式部



「新社員」抄（三） 篠田 大佳

ハチ公像撫づる人ありハロウイーン
カンバス白し絵の具は秋を所有する
ストローのみどり路地裏の黄落
母方の墓白菊が二輪挿し
片麻痺の父に涙といふ言語



特別な夏 須賀 敏子

団栗のストーンと落ちて緑色
より赤く一日待ってトマト挽ぐ
青紫蘇の密密密は虫の園
子等マスク短く終はる夏休み
検温もパスしてプール歩きけり
山の日やりモート登山それも又
ビル未だ広き空地に鶏頭花
手招きて此処にあるよと吾亦紅



猛暑

田中 藤穂

人体に危険な暑さ樹々繁る
明日は雨猛暑終ると予報官
老人パス申告日陰あるうちに
暑き夜のニュースコロナは数増ゆる
蝉の声夜はいつしか虫の音に

八月号正誤

かはほりと友の指さす北の空

空蝉

長崎 桂子

十葉の花は純白傷いやす
梅雨明けの六地藏さま微笑まし
頂上へなだらかにして釣鐘草
おくゆかし蛍袋や蘇る
今年又ゆらゆら来たり黒揚羽
草丈けて潜む音消ゆ夜の秋
空蝉や早回り独楽に似果てる
草叢に賑はひ楽し秋めきて



車椅子宇宙のいろの木下闇 佐藤 喜孝

今日も又川原撫子畦に訪ふ 長崎 桂子

雪溪は巨大雄鶏となりに貂 森 なほ子

しなやかに波紋を染める錦鯉 赤座 典子

紫陽花や雨の波紋の手水鉢 秋川 泉

夏帯に母の残り香オーデコロン 大日向幸江



家居出て箱眼鏡めく季語探し 七郎衛門吉保

坊主バーに仏壇ふたつ秋暑し 篠田 純子

薄暗の給湯室のさくらんぼ 篠田 大佳

夏の雲鎖重たき剣岳 須賀 敏子

梅雨止まず凶鑑にさがす庭の草 田中 藤穂



八月号作品より

七郎衛門吉保・赤座典子・佐藤喜孝

齒磨のあとのコーヒー星月夜

佐藤喜孝

私事だが十二年前に胃癌の手術をし、胃の大きさは半分程になったようだ。以降、食事時の受け入れ量は半減した。食後暫くすると空腹となり、間食を欠かせない食スタイルとなった。以後、齒磨きは就寝直前とした。作者が「齒磨きの後のアルコール」と詠むならストンと落ちる。しかし、この夜はコーヒーだった。頭脳も星月夜の如、眠れなかったのか、眠りたくなかったのか。(吉保)

老鷺の声のやさしき樹海行く

須賀敏子

我ら夫婦も数年に一度は、富士山や富士五湖の周辺を訪ねる旅をする。前回は雪の富士山を身近に見ようと、吉田口五合目を目指したが、途中の積雪で引き返した。山に代わって中国語の氾濫を身近に見てしまった記憶がある。富士山に樹海は欠かせない。何度訪ねてもその大きさに驚嘆する。我らはその大きさを遠望するだけだが、作者は歩いておられるのだろう。羨ましい限り。(吉保)

赤いドアの小さなカフェ夏至真昼

田中藤穂

子供時代に二十年近く暮らした、新宿区下落合の自宅のすぐ近くに、佐伯米子さんのアトリエ兼

自宅があった。そんなことから幼少時より、佐伯祐三を知り、その絵に関心を持っていた。パリで画かれた作品は、レストラン・靴屋・新聞屋・扉など、どの絵にも個性的なドアが描かれている。作者のこの一句からも、パリの風景が見えてきたような気がする。素晴らしい感性に脱帽。(吉保)

我が庭に風力計や青楓

森なほ子

自宅に風力計があるとは、どんな庭なのだろうか？と楽しく想像してしまう。最近はデジタル化された簡便な、風速計と言われるもの多いようだが、半円球殻の風杯で風を受け風速を計り、矢羽根の向きで風向きを知る、斯様な風力計をイメージする。庭の傍らには、そよそよと揺れる楓の木のある様もイメージする。もしかすると、そよそよと風力計が回っているのかもしれない。(吉保)

射幸性は復刻せずや氷菓子

篠田大佳

藤穂さんでも触れた、幼少時を過ごした近辺には、駄菓子屋がなく、子供心の射幸心を満足する機会が少なかった。それでも小遣いが貯まると、子供の足で二・三十分掛かる駄菓子屋に行った。そこは正しく射幸性の巣窟！ガム・飴・せんべい・くじ引き……そして「あたり」が出ると、もう一本貰える氷菓子！作者は駄菓子屋が好きで、復刻を願って止まないのだろうか。(吉保)

秋の火は三和土のうへで造るかな

佐藤喜孝

昔の普通の家は、台所が部屋から一旦降りるようになっていて、その降りた土間を、たたきと呼んでいたようです。段差を上がり降りして、煮炊きなどする、効率の悪い環境でした。いつの間にか三和土は消えましたが、暗く、寒さがじかに伝わる場所での作業を思い出しました。(典子)

梅雨の月テールライトの帯長く

秋川 泉

梅雨の夜は、月だけでなく、すべての景色が滲んで見えます。列をなして走る車のライトも、明かりが長くつながって、帯のように見えると作者は詠んでいます。うねうねと紅の帯が動いていく様が浮かびます。蛇足ですが、晴れた夜の尾灯の列は、個々にくつきりと輝き、「カリオストロの城」のオームのようだ、いつも見えています。(典子)

汐の引く濠の小魚夏ひかる

篠田純子

浜離宮庭園の池には、海水を引き入れた個所があるそうです。そこには海からの魚も入ってきて、汐の引いた時には、小魚がぴちぴちと跳ねているのを見ることが出来ます。夏の日差しのきらきらと輝く、都心とは思えない景色です。庭園では、素敵なコンサートも、屢々催されているとか。都心のオアシスの間近に、生活できている純子さんが羨ましいです。(典子)

夏帯をきつく締め上げ宮参り

大日向幸江

生後約一か月の赤ちゃんに、神社でご祈禱を受けに行くという、お宮参りという行事。初着と呼ばれる、祝いで着を羽織った赤ちゃんを抱く役は、父方の祖母と決まっていたようです。幸江さんは、お孫さんのために、暑さをもとめせず、きりりと正装を決められたのでしょう。素晴らしい機会に恵まれました。(典子)

昼暗し湿度八十五梅雨さ中

長崎桂子

今年は梅雨がいつまでも明けず、いつもとは全然違う速さで、食料等に黴が生えてしまつて大変でした。湿度計をいつ見ても、八十と九十の間のままで、壊れてしまったのかと思うほどでした。色々なものを、早めに冷蔵庫に入れるようにしては、からりと明るい日々を待ち望んでいました。(典子)

父の日や花束捧ぐ孫娘

赤座典子

としよりの日ではない。ないのにおじいさまに孫が花束を捧げる。孫の親が照れて我が子に託したか、自分より孫からいたたく方がきつと喜ぶとの父の子供の図らひかも知れぬ。どちらにしてもほほゑましい光景である。(喜孝)

木々の織る毛氈となるや万緑

七郎衛門吉保

五句とも万緑で作られた。力作といってもよいだらう。この句、中七に「や」を加え八音にして

ある。そして下五を一言減らし折合をつけてゐる。声に出して何回か読むと座りの良いことに気がついた。ドローンで撮られた森の写真など 思ひ浮かべた。(喜孝)

千手観音菩薩 秋川 泉

荷物が多い。ヤドカリのようである。ごく普通に荷造りをして、とにかく荷物が多くなる。

その中に千支の守り本尊ではないが、木片に描かれた『千手観音菩薩』の像と母の紫水晶の念珠がある。これだけは袋に納めていつもある。時々思い出して『千手観音菩薩』の顔を観る。やさしく嫺やかなほへみを湛えたお顔である。



着替・財布・常備薬 森なほ子

旅といっても短いものから海外旅行まで色々ある。本当の必需品は万人共通の着替、財布、常備薬等で、これだけで旅はできる。特別な趣味でもなければ。私はこの三点に文庫本、句手帳があれば十分である。ところが、これだけ用意するのに、何と細々した手間と時間がかかるのかが不思議なところだ。

佐藤 喜孝



森 なほ子

子らの声 今年は無くて盆の家
故里の 入道雲の 似合ふ山
オーダーに ホットが増えてそれが秋

○コロナウイルスによる社会現象の一句か。若者が帰省しやうとすると、親が隣近所の手前来てくれるなど云はれるとか。いつまでこのやうな状態が続くのだらうか。

◎生まれ育ったところが、山・海・川と豊かな自然があるところだと、このやうな自然と一体化した心情の句が生まれるのだらう。「似合ふ」は技能賞もの。

○素直な句。残暑も衰へ秋らしくなってきた。飲み物の注文も温かいものを頼む人が増えてきた。「それが秋」は素直な句に印を押した感がある。

赤座 典子

艶やかに伸ぶる帯なり秋夕焼
幾度も窓辺よこぎる稲光
からからと鬼灯の朱褪せ初める

○幾度も読んだ。難しい句だ。帯と云へば和服の仕上げに使はれるもの。しかしこの句の帯は和服に使ふ帯ではない。夕焼そのものを帯と譬へたとも思へない。雲なのかも知れぬが自信がない。情けない鑑賞者だ。

○「窓辺」で、窓の近くに典子さんは居られるやうす。一般的に云へば稲妻は怖がる人が多いが、安全なところから楽しむとまではいかないが、稲光を観察されてゐるやうだ。

○鬼灯もいつか色褪せ枯れていく。自然の成り行きである。そして網鬼灯になっていくのだらう。

秋川 泉

明早しまんまるまるの月のあり
地表から生えのぼりたる盆の月
夜鳥の声のながなが月夜かな

○「明早し」は夏の季語で明易・明易し・明急ぐ、そして短夜とも。どれを使ふかは迷ふところ。

六月ころの満月は夜の八時半ごろ出て来て、翌朝の五時半ごろ帰っていく。有明の月である。しらじらと夜が明ける薄明の西空にある満月はまた趣があつてよい。

○月の出を月が生まれるといふ感じはあるが、植物の蔓のやうに「生えのぼる」は作者独特の感覚。それにしても三句とも月を詠まれた。拘ることから何かが生まれる。

◎「ながなが」が殊の外よい。一般的に人に好かれぬ鴉だが、注意してみてゐると鳴き声にも趣を感じるのである。月夜で思はずよき声で鴉も鳴いてゐるわいと思ふのは人間の勝手。「夜鴉」自体は魅力のある語彙だが、月夜であるからして一考を願ふ。



大日向幸江

簾買ふメダカ金魚も数に入れ
線香花火海月の形に開きをり
飯を食べ枝豆を食べ兜太逝く

○「簾買ふ」は夏を迎える準備である。大物の簾はわかるが、メダカも金魚も夏を迎えるために必要だと。季節を楽しむ術を熟知の幸江さんである。季語が三つも入ってゐるが気にすることはない。◎音がする花火と違ひ、線香花火は耳を澄ませなければ聞こえないほどかすかな音である。火花の散り様から海月を思ふ。短い、一瞬の線香花火の命の中に海月の姿を見る幸江さんの詩心である。◎金子兜太の忌日は二〇一八年二月二十日。もう二年余が過ぎた。一方で兜太のことを思ひつつ、生者は飯を食べビールを飲みつつ枝豆をつまむ。兜太といふ字面からも兜太俳句はふとぶとしい。そして幸江さんのこの句もふとぶとしい。金子兜太へのリスペクトの一つの形。

七郎衛門吉保

雨風に蜘蛛防災か糸補強
山椒食みお礼に舞ふや秋の蝶
空高く帰燕を試す一家かな

○蜘蛛の巣の様子をよく観察されてゐる。このやうに庭木に掛けた蜘蛛の巣を取払ひもせずに興味を持って見てをられる。俳句を詠めなければ蜘蛛の巣は跡形もないかもしれない。

○秋の温かい日差しに蝶が舞ひ出てきた。山椒の木の辺りに翔んでゐるのかも知れぬ。幼虫の頃山椒の葉を坊主にしたお礼と云ふか、お詫びと云ふか、舞で応へてゐると吉保さんは詠まれた。

◎燕が南の国へ帰るころになった。空高く飛んでゐる燕を見つけ、きつとあの群れは長旅の準備をしてゐるのだらう、と思はれた。群と云はず一家と表現したところに旅の安全を願ふ吉保さんの思ひの表れ。

篠田 純子

濃厚接触ぞ香水の近し
夫と子のスマホ競馬や秋暑し
飛んで来て口開けたまま夏すずめ

○純子さんの先句に〈濃厚接触の有無を問はるる猫の妻〉がある。佳句である。この「猫の妻」の句に「香水」の句は一步譲る。

○「スマホ競馬」はスマホで競馬のゲームをしてゐるやうに読めたが、さうではないだらう。本物の競馬を父子であだかうだと云つて楽しんでゐる。そのことを妻であり母である純子さんは「秋暑し」と思はれてゐる。さういふことで間違へがなければ「スマホで競馬」が受け取りやすい。

○私も猛暑のさなかのただ口を開けてゐる鴉を見た。鳥は暑さを凌ぐのに口を開けるのだらうか。名詞に安易に春夏秋冬を直付けするのは注意しなければならない。

篠田 大佳

桃 届く 桃の 一つの 腐る かな

D N A に 虐待 の き ず 法師 蟬

秋の 浜 令和 二年の えぢや ない かな

◎買ひ求めたか頂戴物か知らぬが、桃の箱が届いた。昨日も今日も美味しく戴いてゐたが、気がつかぬうちに食べやうとした一つが痛んでゐた。といふやうな何の変哲もない事柄を述べたやうな俳句だが、「かな」一つで俳句として立ち上がる。「かな」の力は計り知れない。「かな」の不思議さ

を感じた一句。

○誠に残念ながらDNAに傷を持って生まれてくる子供がゐる。人間のDNAはどこかに傷があるのではないか。完璧なDNAなどあるのだらうか。門外漢には霧中である。述べるのに躊躇する句である。

○「ええじゃないか」は慶応三年八月から十二月にかけて、近畿、四国、東海地方などで発生した騒動とか。現実には秋の浜辺で何かが行はれたらしいが。「秋の浜」でなく「令和二年のえぢやないか」を生かし、象徴的な語彙を探してみたい気がした。

須賀 敏子

台風 の 夜に ゴキブリ たたき けり

嵐 去り 低く 飛び 交ふ 秋 茜

○二句共に淡々と見たこと為したことを述べてをられる。俳句の一面の良さであり、読んで楽しんだ。しかし一面物足りなさを覚える思ひも生じた。

○季節と場所によつては人間にぶつかるほど秋茜の群れに会ふ。台風通過の山野での出来事。

田中 藤穂

ドライブの土産薄と山の水
大雨の濁りが少し滝の水
樹々の奥大師の像も秋めける

◎ドラえものの道具に「どこでもドア」がある。ドライブに連れて行ってもらふと、いつも「どこでもドア」だなあと感心する。藤穂さんもドライブならではのお土産をたのしまれてゐる。電車の中に薄など持ち込んだらほほけて絮など漂ひでしたら大変。おいしい水をペットボトルに詰め込んで持ち帰るなど重くて出来ない。薄と山の水はよいお土産だ。

○滝の句では新鮮である。見た強さがある。「滝の水」は説明しすぎ。

○大師像が秋めくはずはないが、大師様を囲む樹木たちは時が来れば秋めいた素振りを見せる。さういふ中の大師像もなんとはなく秋めいて見えるかもしれない。藤穂さんの心持である。

長崎 桂子

秋の甲子園高校野球交流試合
盆に名張の日米合同慰霊祭
八月尽紙面の戦後に涙す

○甲子園で行われる高校野球は春と夏だと野球に疎い私でも知ってゐる。秋は確か神宮球場ではなかったらうか。それがコロナの影響でこの句のやうになったのだらう。旧正月の頃からのコロナ騒動も先が少し明るさが見えた気がする。事実を述べただけだが、桂子さんのほっとされた安堵感が伝はった。

○どのやうな慰霊祭だったかと名張市のホームページやフェイスブックを訪ねたが分らなかった。事実のほかにもう少し心持を述べられてもよいのではと思ふ。

○あの戦後の混乱を日本人はよく耐え、ここまで来たものだ。来し方を思ひ思はずの落涙である。



広いアメリカ

篠田純子

45年前の夏、アメリカとカナダを21日間、旅した。往復を含め七日程は団体旅行だが、中の二週間は、夫婦の放浪の旅となった。トラベラーズチェックなる小切手を腹に巻き、銀行を探しては換金した。泊まる場所の確保と、食べることに苦慮した。事前に購入したグレイハウンドのフリーチケットで、移動は夜行バスだ。いかにアメリカが広いかを実感した。私にとっての旅の必需品は、お金である。



老眼鏡 長崎桂子

三十才代の病気が持病になり常用している内科の薬は一番大切な必需品です。年齢を重ねて来た此頃は体調も変化が出て来て薬を必要とするようになり薬は増えました。老眼鏡をはじめとする日常生活の補助品も必要ですので細心の注意をして用意をします。



あをキーワード俳句辞典（ふたーふた）

二上山

変りなし二上山の秋夕陽

早崎 泰江

双子

双子山帰る列車の冬茜 須賀敏子

斉藤 裕子

二言

ハンターと二言三言シダンゴ山
二言三言交わす付き合ひ半夏生

須賀 敏子
篠田 純子

ふたたび

鷹女像へふたたび成田初まうで
海寇の再び三たび雲の峰
真つ直ぐの脚再びや姉の春
秋燈下再びといふ難問題
北の旅梅見再び清らけく
ふたたびの五年日記とスニーカー

堀内 一郎
竹内 弘子
須賀 敏子
藤野 寿子
藤野 寿子
須賀 敏子

二つ

かはせみや二つ並びしトルコ石
所在なしたつた二つの烏瓜
草じらみいつの間にやらふたつみつ
湯呑ふたつ眼鏡のふたつ置炬燵
春北風野暮用二つ三つ抱へ
葉がくれのさざんかふたつ白く濃く
吊革にふたつの手首百日紅

赤座 典子
赤座 典子
鈴木多枝子
芝宮須磨子
後藤 志づ
佐藤 恭子
佐藤 恭子

油點草紙鉄砲に弾ふたつ
二つ三つ大きくさめする女かな
古堀の化身の紋白蝶ふたつ
蟬の殻ふたつよつと盤水居
湯島の梅孫にもとめし鶯ふたつ
川二つ渡りきて坐す初句会
空財布二つ出てきて鳥雲に
雪の野に涯あり燈二つあり
椅子二つ程よく離れ藤の花
ひとり居の四隅の暮や柿ふたつ
妻さがす二つの寒き部屋はあり
寒卵割りても二つにはならず
芝青む土竜の穴のふたつ三つ
稲妻を二つに割きて浅間山
隣から白桃二つ香立つ
天辺に熟柿をふたつ町なかに
甘酒をふたつ買ひきし冬さくら
春待つや卵を割れば黄身ふたつ
あつけなき訃報ふたつや暮の春
水中に身二つとなる海豚の子
二つある竈の前の洪団扇
鶺鴒の橋の半らの星ふたつ
黄葉や視線の先に二つ三つ

佐藤 恭子
芝 尚子
竹内 弘子
堀内 一郎
堀内 一郎
芝 尚子
長崎 桂子
長崎 桂子
須賀 敏子
佐藤 恭子
長崎 桂子

昼炬燵ひとつふたつは後遺症
 鳩ふたつゐると鳴きて潜きけり
 ため息のつづけて二つ春の宵
 緑蔭に入るや淋しき耳二つ
 青鳶の中に二つの窓があり
 たまごから黄味二つ出て春の朝
 筍飯二つ結んで吟行会
 青梅を二つ握りて母恋へり
 コンビニの弁当二つ花疲れ
 みち二つどつちにしよう返り花
 荒野原柚子の実二つ木の低く
 ふたつ身となるまで土偶立ちつくす
 卵のむふ二つ飲む大暑の日
 梅雨あがる白太に釘の跡ふたつ
 相聞のひとつやふたつ假の世ぞ
 黒眼ふたつ冬毛あざらし反り返る
 茜雲七草粥の椀二つ
 ぼうたんの薔二つをいとほしむ
 ベランダに見知らぬ木の実二つ三つ
 八月の箱を二つに分けてゆく
 函底にひそますさくら貝ふたつ
 つづれさせあひおひばしはふたつ橋
 牡丹や今年も花芽二つ三つ

篠田 純子
 芝 尚子
 齊藤 裕子
 田中 藤穂
 鈴木 多枝子
 須賀 敏子
 齊藤 裕子
 渡邊 友七
 齊藤 裕子
 堀内 一郎
 長崎 桂子
 佐藤 喜孝
 篠田 純子
 佐藤 恭子
 佐藤 喜孝
 竹内 弘子
 山莊 慶子
 早崎 泰江
 森山 のりこ
 堀内 一郎
 佐藤 恭子
 佐藤 喜孝
 早崎 泰江

熱燗にひっそり沈む牡蠣二つ
 春が来たきた金平糖をふたつ播く
 装ひては二つ三つ足す茸飯
 鐘の音をふたつも秋の法隆寺
 不機嫌の訳二つあり葱坊主
 梅雨の星使途不明なる鍵二つ
 秋初め喜び事の二つあり
 石塊にかんばせふたつ佛の座
 顔ふたつ川中島の飾り風
 子の捕りし螢二つや悲喜の籠
 遠地にて文旦ふたつみつめあふ
 付け足さる林檎嘴跡二つかな
 柚子二つ吾子にみたてて撫でし風呂
 バイク二つ番のやうに春夕べ
 ふたつみつ山重ねたり霧晴るる
 茸汁「こはい」に漢字二つある
 橋ふたつ渡りし先やおかめ市
 柚子風呂に溜息二つ沈めけり

赤座 典子
 佐藤 喜孝
 齊藤 裕子
 佐藤 喜孝
 齊藤 裕子
 田中 藤穂
 赤座 典子
 佐藤 喜孝
 竹内 弘子
 七郎衛門吉保
 佐藤 喜孝
 赤座 典子
 森 なほ子
 森 純子
 篠田 純子
 森 なほ子
 秋川 泉
 須賀 敏子
 篠田 純子
 鈴木多枝子
 木村茂登子

二手
 双葉

追はれたり二手に分かれ嫁が君
 朝顔の双葉。バナリと開きけり
 梅檀は双葉より芳し七五三

佐藤恭子遺句抄2

終戦日異国語のなか通り抜け

異国語に合はせ笑ふ子夏の街

花サルビア銀座吟行立ち飲みす

上田吉二郎のポスターにある涼しき字



吐夢・絹代・扇太郎・橋蔵会ひし夏

ビール飲んだ顔して銀座どまん中

風鈴や卯波路地には鳴らぬやう

柚子湯にはばさりと入りすると出づ

尋ねくる猫のことばも小春かな

桜咲く七十にそつと近づきて

うすうすと地に影花の散りゆく影

初花の下枝に猫の集まりて

初花の上枝に鴉のとまりゐて

思ひだす思ひだせない曼殊沙華

あとがき

句会

およそ半年ぶりに句会を持った。新鮮であった。あまりに間が開いて選句にも疲れた。心よい疲れであった。

あをキーワード俳句辞典

「あをキーワード俳句辞典」を作りながらああこんないい句があったのか、と己の記憶力の無さに愕然としつつもうれしくなる。記憶力の無さでは、こんな句を作ったのかと疑心をもたげる始末である。秋の夜長をあんな句こんな句、あんなこと、こんなこととおいつおもひだすことである。

不易流行

本来芭蕉の俳語であるからむずかしい言葉だが私は、変ぬもの、変てはならぬものと、そのときどき変化するものに溺れぬやうにとの自戒のことばにしてゐる。『ホトトギス』十一月号で稲畑廣太郎氏が

しつかり調べたわけではないが、約百年前に、今回のウィルスよりも、現時点では被害が大きかった所謂「スペイン風邪」であるが、当時のホトトギス大正八年前

後になるが、その時の虚子選の雑詠をざっと繙いたが、句の中に「スペイン風邪」の言葉は見つける事が出来なかった。当時の虚子選は厳選であったので、投句の中にはこの言葉があつたのかも知れないが、少し考えさせられた。

と述べられてゐた。参考になる。今進行中のコロナウィルス（まだ名前が定まらないのが不思議）を取り上げ方も結社それぞれである。調べてはゐないが『あを』は多い方ではないかといふ印象である。（喜孝）

二〇二〇年十月号（2刷）

発行日 十月二十七日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090 9828 4244

ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カッタ／須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402

佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）